様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２１６５

研究課題名（和文）インド・チベット密教術語集成構築のためのタントラ注釈文献の綜合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Tantric commentaries for the Lexicon of Indo-Tibetan Tantric Buddhism

研究代表者
菊谷　竜太（Ryuta, KIKUYA）

京都大学・白眉センター・特定准教授

研究者番号：５０５２６６７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　アバヤーカラグプタによるインド密教における百科事典的注釈書『アームナーヤマンジャリー』第１篇の校訂・訳注研究を新出梵蔵バイリンガル写本にもとづき行った。本研究を通じて、同書がアバヤーカラグプタの他の著作と密接な関係にあるばかりではなく、指摘されていたように、ラトナーカラシャーンティおよびカマラナータの『ヘーヴァジュラ』注より大きな影響を受けていることが明らかとなった。また、他の篇にみられる『秘密集会』系からの影響も解析を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　『アームナーヤマンジャリー』第１篇のバイリンガル写本の梵蔵翻刻はすでに終え、全体の精密な校訂・訳注制定作業に入っている。指摘されているように『アームナーヤ』にはラトナーカラシャーンティとカマラナータからの影響が大きく見られるが、自説に合わせるために適宜に引用範囲を取捨選択し、一部改変も行なわれている。こうした姿勢はアバヤーカラの著作全体において顕著であるが、注釈文献にしばしば共通してみられる傾向であり、その過程を明らかにすることは密教文献にとどまらずインドにおける注釈文献の解明にも役立つものと思われる。

研究成果の概要（英文）：I am engaged on study of Amnayamanjari, the Encyclopedic commentary of Abhayakaragupta, especially the first chapter based on the New-found Sanskrit-Tibetan Bilingual codex. Throughout this study, it has been shown that the Amnayamanjari is not only closely related to his other works, but also as was pointed out, Hevajra commentaries of Ratnakarasanti and Kamalanatha. It was found that they were more influenced by the Guhyasamaja system.

研究分野：インド・チベット仏教学

キーワード：インド密教　注釈文献　アバヤーカラグプタ　『アームナーヤマンジャリー』　『サンプトードバヴァタントラ』　『アバヤパッダティ』　ラトナーカラシャーンティ　カマラナータ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

人文学における文献情報の視覚化・TEI（Text Encoding Initiative）の重要性が高まっているが、日々積み上げられていく膨大な情報を整理・統合しつつ必要な情報のみをいかに効率よく取り出せるかということは人類にとって最大の関心事の一つと言えよう。インド仏教最晩期の学僧アバヤーカラグプタ（11-12 世紀頃）もまたその課題に直面した一人であり、数百年に渡って蓄積されたインド仏教の知識を整理・統合し、チベットへと組織的に導入した。本申請課題は最近梵蔵バイリンガル写本が発見されたアバヤーカラグプタの百科全書的密教注釈文献『アームナーヤマンジャリー（*Āmnāyamañjarī*・口伝の花房）』第１篇の校訂・訳注研究によってインド仏教における密教注釈文献固有の性格を明らかにするとともに、電子化を通じて文献情報を可視化し最終的に中世インドにおける注釈文献の受容と展開を知るための手がかりを得ようとするものである。

２．研究の目的

インド学・仏教学にとって不可欠な梵文写本の研究は情報技術の発展にともなって急速に進展し、膨大な写本の電子化が世界各地で進められてきた。南アジア写本データベース（東京大学）、NGMCP（Nepalese-German Manuscript Cataloguing Project、ハンブルク大学）、Sanskrit Manuscript Project（ケンブリッジ大学）などの研究機関が精力的に写本のカタログ・画像データ化を推進する一方で、人文情報学（Digital Humanities）の技術を利用した Bauddhakośa、SAT-RBIB（SAT-Research Base for Indian and Buddhist Studies）、ITLR（Indo-Tibetan Lexical Resource）の活動も進められている。このような一次資料の情報共有化に関わる流れのなかで、SARIT（Search and Retrieval of Indic Texts）のように原典資料の基本的な構造を軸に個別の箇所の解釈・異読・引用などの付随情報をマークアップ言語によって視覚化しうる TEI の活用が、近年の人文学における重要課題の一つとなっている（下田・永崎［2010］、高橋［2010］、苫米地［2014］）。しかしながらマークアップ化を行う前提としてはあくまで写本を含めた一次資料を読み解く校訂・訳注作業が求められ、それ無くしては成立しえない。なかでもインドの古典資料を扱ううえで注釈文献の内容構造を解析することは必要不可欠と言える。

３．研究の方法

このような学術的な背景および問題点を踏まえて、本研究の主たる研究対象となるのがアバヤーカラグプタの手になる百科全書的密教注釈文献『アームナーヤマンジャリー』である。第１篇に説かれた同書の骨子・「要義（piṇḍārtha）」にはアバヤーカラが網羅した全 25 項目からなるインド密教の主要教説が挙げられており、これらの項目にしたがって同書の全体が構成される。すなわち、第１篇の解析が『アームナーヤマンジャリー』全体の内容を把握することにつながると言えよう。申請者は最近新たに発見され（苫米地［2017］、田中［2017］）、サンスクリット・チベット訳が併記された梵蔵バイリンガル写本を利用してこれまで校訂・訳注作業を継続的に進めてきたが、第１篇前半部については基礎的な作業をすでに終えている。したがって本研究では残された後半部の校訂・訳注作業を期限期間内に完遂させ、得られた情報をできうる限り電子化を通じて視覚化するとともに仏教内外の文献と比較・対照させることによって、インド密教における注釈文献の基本的な性格を明らかにすることを目的とする。

４．研究成果

『アームナーヤマンジャリー』はインド仏教の歳晩期に活躍したアバヤーカラグプタによって著された『サンプトードバヴァタントラ（*Saṃpuṭodbhavatantra*）』に対する綜合的注釈書であり、同じくアバヤーカラによる大部の曼荼羅儀軌『ヴァジュラーヴァリー（*Vajrāvalī*）』とは相互補完的な関係にある。後者の『ヴァジュラーヴァリー』については桜井宗信教授の灌頂儀軌部分（桜井［1996］）に加えて森雅秀教授によって全体の校訂がなされているが（Mori［2009ab］）前者『アームナーヤマンジャリー』については大部であることに加えてまとまった梵文原典が当時利用できなかったことから、プロジェクト申請時には一部を除いて本格的な研究は未だ充分になされていない状況にあった（Tomabachi・Kano［2008］）。

このような状況において申請者は新たな研究課題のもとで梵文原典が遺されたアバヤーカラの著作を参照しながら『アームナーヤマンジャリー』第１篇の校訂・訳注作業を独自に進めてきた。代表的な 11 注釈相当語のうち、同書は「広注（ṭīkā）」に当たるが、「注解（vivṛti）」と同様に多くの引用部分が含まれており、一般的にそうであるように『アームナーヤマンジャリー』もまたしばしば聖典本来の文脈から離れ個別の内容の仔細な説明に終始する傾向にある。

一方、同書の注釈対象『サンプトードバヴァタントラ』についても『秘密集会』をはじめ他の聖典からの引用によって全体が占められており（野口［2006］、Szántó［2013b］）、サンヴァラ・ヘーヴァジュラ共通の釈タントラ（ākhyāna/vyākhyā-tantra）とも呼ばれることから、１）根本聖典ないし２）釈説双方の性格をあわせもつと考えられる。このことは、アバヤーカラグプタ自身が『サンプトードバヴァタントラ』の第１・２章が１）根本聖典に、第３・４章が２）釈説に当たるという理解を示すことからも裏付けられる。したがって『アームナーヤマンジャリー』を研究することはすなわち注釈文献におけるこのような解釈階梯をすべて網羅することにつながり、単なる注釈文献の研究にとどまらず、根本聖典『サンプトードバヴァタントラ』を研究するうえでも重要な意味をもつ。

さらに課題の中心となる第１篇には『アームナーヤマンジャリー』全体の基本的な枠組とともに各項目における個別の注釈方法についての指針も示されるため同書にあわせた書式を新たに構築することにより XML を活用した密教注釈文献の可視化を容易に行うことができる。現在、これまでに得られた研究成果をもとに第１篇の校訂テキストとともにプトゥン・リンチェントゥプの『サンプタ広注』とあわせた『アームナーヤマンジャリー』全体のシノープシスの公開準備を進めている。『アームナーヤ』に引かれた引用典籍については、すでに苫米地等流博士の一連の研究によって明らかにされているが（苫米地［2017、2018ab］）、ラトナーカラシャーンティとカマラナータの『ヘーヴァジュラ』注をはじめ、『四百五十頌』関係など今後新たに得られる情報をも随時に反映できるように工夫したい。

以上の得られた研究成果の一部については、国際シンポジウムとワークショップ「梵文写本研究国際ネットワークの構築に向けて」をハルナガ・アイザックソン教授と堀内俊郎博士と共同でハンブルグ大学において実施した。その開催内容は以下の通りである。

・International Workshop and Symposium at Hamburg University Toward a Construction of an International Network of Sanskrit Manusctipt Study, Universitat Hamburg, Asien-Afrika-Institut, Department of Indian and Tibetan Studies, Alsterterrasse 1, D-20354, Hamburg, Germany
・Schedule: March, 2020, 8th (Sun): 9:00-9:15: Opening Speech (Harunaga Isaacson, Ryuta Kikuya, Toshio Horiuchi), 9:20-12:00: Āmnāyamañjalī reading (Kikuya), 13:30-15:30: reading by Kazuo Kano, 15:45-17:30: Symposium (Horiuchi, Kikuya), 9th (Mon): 9:00-11:30: Amnāyamañjalī reading (Kikuya), 13:00-17:30: Arthaviniścayasūtranibandhana reading (Horiuchi),10th (Tue): 9:00-11:30: reading of other texts and discussion

最終的に出版あるいは公開を予定する内容は以下のとおり：１）イントロダクション：１・１）インド密教におけるタントラ聖典の伝承過程ならびに密教注釈文献の基本的性格、１・２）アバヤーカラグプタの活動とその著作、１・３）写本情報、校訂方針、チベット語訳の翻訳状況、２）アバヤーカラグプタ著『アームナーヤマンジャリー』第１篇校訂・訳注研究、３）『サンプトードバヴァタントラ』ヴァース・インデックス＋注釈中の位置対照表、４）原語（サンスクリット・チベット語）索引＋密教術語に関する語彙解説、５）語形・韻律・文法解説、６）事項索引、７）文献一覧

上記の出版・公開にあたっては、出版を予定している単著と重複する内容は可能な限り避け、Harunaga Isaacson 教授の協力のもと、全体を英語で出版することを予定している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 菊谷竜太	４．巻 50
２．論文標題 『四百五十頌』Sardhatrisatika覚え書	５．発行年 2017年
３．雑誌名 密教学研究	６．最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 ラマダンパ・ヴァジュラーヴァリー28幅曼荼羅集について
３．学会等名 印度学宗教学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 アバヤーカラグプタのホーマ儀軌『光の花房』Jyotirmanjariについて
３．学会等名 密教研究会学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 インド密教における術語の収集にあたって―アバヤーカラグプタの『アームナーヤマンジャリー』とプトゥンの『サンプタ広注』について
３．学会等名 平成30年度バウッダコーシャ第１回研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 『四百五十頌』Sardhatrisatikaの伝承について
３．学会等名 印度学仏教学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 インド密教におけるホーマ儀礼
３．学会等名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム第5回シンポジウム・「古典インドの哲学と学問―始まりと展開―」
４．発表年 2018年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 インド密教における灌頂次第とタントラ階梯
３．学会等名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム第６回シンポジウム・「古代・中世インドの王権と宗教」
４．発表年 2019年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 ジュニャーナパーダ流における『二百五十頌』と『四百五十頌』について
３．学会等名 日本密教学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 「ヴァジュラーヴァリー曼荼羅集」について
３．学会等名 白眉セミナー
４．発表年 2017年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 Samputodbhavatantraのkalpaをめぐる Amnayamanjaripindarthaにおけるmanjariをめぐって
３．学会等名 第58回印度学宗教学会学術大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 法灯の乗り物ー近代チベットにおけるリメー運動をめぐって
３．学会等名 アジアの聖者に関する研究会「近代アジアにおける聖者の諸相」
４．発表年 2016年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 新出『四百五十頌注』梵文断片について
３．学会等名 印度学宗教学会第61回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 インド密教における注釈文献の伝承について―『四百五十頌』を中心に―
３．学会等名 令和元年密教研究会学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ryuta KIKUYA
２．発表標題 Light of the World The Transmission of Guhyasamajamandalavidhi/Lokalokakarika-mandalopayika/Sardhatrizatika from Jnanapada and Dipamkarabhadra to Abhakaragupta via Ratnakarasanti
３．学会等名 Colloquium in Hamburg university, Asien-Afrika-Institut
４．発表年 2019年

１．発表者名 菊谷竜太
２．発表標題 インド密教における曼荼羅儀軌と注釈文献
３．学会等名 インド思想史学会第26回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ryuta Kikuya
２．発表標題 Lost Collection of Vajravali painting sets
３．学会等名 INTERNATIONAL WORKSHOP AND SYMPOSIUM AT HAMBURG UNIVERSITY, Toward a Construction of an International Network of Sanskrit Manuscript Study
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考